

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆく  
よしなしごとを、そこはかたなく書きつくれば、あやうこそも  
のぐるほしけれ。いでやこの世に生れては、ねがはしかるべきこ  
とこそ多かめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生のす  
ゑばまで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさ  
まはさらなり、たゞ人も舍人などたまはるきははゆゝしと見ゆ  
。そのこうまごまでははふれにたれど、なほなまめかし。それより  
下つ方は、ほどにつけつゝ時にあひ、したり顔なるも、みづか  
らはいみじと思ふらめどいと口をし。法師ばかりうらやましか  
らぬものはあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ」と  
清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひまうにの  
ゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけむ  
やうに、名聞ぐるしく、佛の御をしへにたがふらむとぞ覺ゆる  
。ひたぶるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ  
。人はかたちありさまの勝れたらむこそあらまほしかるべけれ。  
ものうちいひたる聞きにくからず、あいぎやうありて詞多から  
ぬこそあかずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせ  
らるゝ、本性見えむこそ口をしかるべけれ。しなかたちこそ生  
れつきたらめ、心はなどかかしこきよりかしこきにもうつさばう  
つらざらむ。かたち心ざまよき人も、ざえなくなりぬれば、しな  
くたり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさる  
ゝこそほいなきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、  
作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人のかゞみ